

無定形文の一考察

小日向 哲

基礎教育課程

An Aspect of Amorphous Sentence

Satoshi KOHINATA

Division of Liberal Arts and Science

(Received October 12, 1998 ; Accepted January 13, 1999)

Any and every part of speech, a word or a phrase, even an interjection, can be a sentence, some circumstances qualified, as well as an utterance. Here comes an amorphous sentence, going by the alias of an inarticulate sentence. A certain part of speech can be categorised into an individual sentence, with the realization of the nexus concerned of a sentence based upon the very axis of coordinates of the context, judging from its antecedent, rather than from its postcedent.

“Oh, no!”, the very ejaculation exclaimed through the lips of the wife of Kennedy, John Fitzgerald (1917-63), the 35th President of the United States of America could be classified into none other than a sentence, which connotes innumerable items of affairs personally.

At that juncture, her beloved husband, the president was assassinated by lethal bullets of some ruffian hidden behind deliberately on parade.

1. 文・その形式とコンテキスト

Bloomfield はその著 *Language*¹⁾ で、文型を ‘full sentence’ と ‘minor sentence’ とに二大別している。もし後者が前者に対して従属関係にあるのなら、この二大別は無意味である。この両者は従属と言うよりも寧ろ対等の関係にあるもので、全体と部分なる関係にあるものではない。発話としての機能から考えても、一方を他方で代用することは不可能である。各々が特有の役割を果たしているからに他ならない。

さらに彼は ‘full sentence’ をもって favorite だとしているが、文語はさておき、少なくとも口語では ‘minor’ の方が寧ろ favorite ではあるまいか。使用頻度の点からも ‘full’ と ‘minor’ の間に優劣の差はつけがたい。

Jespersen が *Essentials* で nexus(synapse) を持つ文とならんで、語あるいは語群からなる、所謂別種の構造を持つ文を ‘amorphous sentence’ と呼んでいるのも将に同断である。

まず、語＝語(句)なる場合を想定し、語がそのコンテキストから見て nexus 関係を備えているものを対象として論を進めて行く。

語からなる文と、節からなる文との間に本質的な差異

を設けず、等しく文として受け容れる立場に立って初めて、“More than two hundred different definitions of the sentence confront the worker who undertakes to deal with the structure of English utterances.” (Fries, C. C. *The Structure of English*, p. 9.) というような混沌とした状態も客観的に評価できるのである。Fries は英文法について満足する立言を行うのに ‘situation utterance units’ と ‘response utterance units’²⁾ の区別立てをしない事が大きな障害になっていると述べているが、この障害とは、より正確には、‘amorphous sentence’ を実際には文として認めながら形式面では依然として文を節構造と直結せんとする極く自然な、一面余りにも単純な傾向に他ならない。極言するなら、『文』とは発話の一単位であり、それがどのような構成要素を擁するかは、その時に触れ、折に触れ実に千差万別である。いま、‘a dog is barking.’ と ‘a barking dog.’ を対比するとき、前者には nexus としての『まとまり』、後者には junction としての『まとまり』が感じられる。しかし文意の『まとまり』というとき、節構造の伝える『何々はどうかである。』という、ある特定の観点からの意味の『まとまり』—主従関係(二重判断形式をふくむ)—が問題にされているので、この『まとまり』感は、意味内容の問題よりも、むしろ形式上

の問題といえる。junctionの方がnexusよりも『まとまり』を欠くと感じられるとすれば、それは前者には後者に内包される可能性が常に開けているからである。

因に nexus としての意味の『まとまり』は、専ら節構造に限定されることはない。一般に言語の意味は節をも含めて発話の場に依存している場合が多く、言わば言語の意味は、恒数的な面と発話の場の関数と看做さなければならない現実がある。即ち標準的な構造をもつものが FS であり、もたぬものが AS である。意味の恒数的な面からは nexus としての『まとまり』を欠く構造にしても、発話の場からの支援によりこの関数としての『まとまり』を伝え得るのである。

斯様な見地から amorphous sentence (AS) も発話の場を多面的に考慮に入れるとき、full sentence (FS) にもまして、しかも特に発話における AS の効果的な伝達力には FS 以上に強く興味が惹かれるところである。

2. 『文』の音声的要因

文なるものに不可欠な要素のうち先ず第一に考えられるものは、Intonation であると言える。Pitch Levels や Terminal Contours が考えられなければならない。特に発話の場合には、この Pitch Phoneme と Terminal Contour とが発話の意味の限定に大きく影響する。また Tone, Tempo, Prominence, Pitch Range, Rhythmicality³⁾なども当然考慮されるべき諸現象であり、延いては Kinesics も考え合わされる一要因と言えよう。とくに AS の場合には、これらの諸要素はその sentence sense の確立に寄与するところが、FS の場合より遙かに大きい。AS の文体が Shakespeare ほどの多義に亘らずとも、砕けていればいるほど、その連座に絡み合う要素も自ずと増えてくる。

In speech we mark off sentences, one from another, by complicated adjustments in the pitch of the voice.
(Roberts, P.: *Patterns of English*, 1956, pp. 57f.)

Every time we utter a sentence, we use some kind of intonation, and the meaning of our sentences changes according to the intonation we use. (*ibid.* p. 227.)

一般に AS と FS を対比するとき、intonation が前者に与える影響は後者に与えるそれよりも大きく、意味の限定に与る役割もそれに比例している。文が amorphous であればあるほど特にその傾向が強い。こういった事柄も minor premise として、これから AS を実験台にのせて、主としてそのコンテキストを重点にその実態から文

意の伝達を考えて行きたい。これからページを追って出てくる例文の(1)から(24)までに、FS を考慮対象としてゾンデを入れてゆく。

3. AS と Ellipsis

ここに Ellipsis⁴⁾が出番に痺れをきらしている。Ellipsis に対して『省略』という訳語を当てることにする。これは幾何学上の約束としての線、または点に例えたらよいものであって、線や点は、いかに細かく小さく表わしても、面積や長さを持つ限り、幾何学の定義に叶うものは実在し得ないのである。Ellipsis の場合も、類似構造を対比させるとき、その存在がどれほど歴然としているようにみえる場合でも、それはある約束、定義の代替物とは言いえても、その実体は存在し得ないのである。これら約束、定義には事実上満足させる事のできない条件が含まれている所以である。今ここに Ellipsis に関する一つの定義を取り上げよう。

‘Ellipsis’

534. When a language drops words in groups and sentences because these words are not absolutely required to make sense we have the phenomenon of ellipsis.

(Sweet, H.: *A New English Grammar*, 1891)

ここに“language”と言って“speech”⁵⁾に特に言及がない点にも幾多の問題が潜んでいよう。Ellipsis は grammatical なもの、brachylogy は ungrammatical なものとされているが、その criterion は奈辺にあるのであろうか。多面とりわけ気になるのが、‘not absolutely required to make sense’と言う一件である。この解説からすると、Sweet は省略のある語句とない語句とが同じ意味内容を伝えるということを前提としており、しかもその対比に当たっては省略のない語句の伝える意味内容が礎となる、と考えているとしてしかとれないが果たしてそれを可としてよいのであろうか。局部的にはあるが‘not absolutely required’なる語句のないときの方が寧ろ『より有効な』伝達が行えないだろうか。今日まで世の何人が、上記3語に関わる文を書いたり、語句を用いたりして来たであろうか。与えられた語句が、それに何かが付加したもの、または逆に省かれたものとをイコールで結ばれる事は矛盾の二語につきるとしか言い切れない。

英語が P. E. から Mod. E., M. E. そして O. E. へと遡るにつれて、と言うより O. E. 時代では彼等には ellipsis sense は無かったと言えよう。文あるいは語句について、その前後に省略語句が二様三様に想定される場合でも現

代的な省略感は無かったと言っても敢えて過言ではなかろう。与えられたコンテキストで、与えられた語句が如何に機能しているかを察知することが肝要なので、ここで省略論をもち出すと問題が却ってこじれ兼ねない。例えば Contact Clause⁹⁾などはこの好個の例であろう。文法的見地、論理的見地からすれば、言葉たらずの憾を受けるかも知れないが、Contact Clause はその時、その場に於ける話者の最も自然な姿と言えよう。喜怒哀楽の情が高まるとき、これが普通とは異なった表現で伝えられることは、これ即ち我々の日常茶飯事である。これを冷静な発話の場の省略態と取ることは、我々の言語活動の一側面を看過し、過小評価する事になりかねない。

When anyone wants to give vent to a strong feeling he does not stop to consider the logical analysis of his ideas, but language furnishes him with a great many adequate means of bringing the state of his mind to the consciousness of his hearer or hearers.

(Jespersen, O.: *Essentials of E. G.*, 1933, 10. 9.)

このように Jespersen も先に引用した Roberts 同様、他に同書でも言っているように、同一語句でもその intonation により異なる意味内容を伝えることができる。疑問、命令、感嘆、賞賛、懇請などである。

4. 仮説の例証

(1) Soon he could see the long white front of the mill shining in the moonlight, *and to the right, half buried in a huge copper-beech tree, the mill-house.*

(Read, H.: *The Green Child*)

上例にはギリシャ、ラテン語構文を彷彿とさせる hyperbaton 現象も窺えるが、synchysis とまではなっておらず、AS の気配を帯びる文構成の一部となっている。

(2) Two hours. One hundred and twenty minutes. Anything might be done in that time. *Anything. Nothing.* Oh, he had had hundreds of hours, and what had he done with them? Wasted them, split the precious minutes as though his reservoir were inexhaustible.

(Huxley, A.: *Crome Yellow*)

(2) で第一に考慮の対象となるものは、italics の 2 語である。これら各々の名詞は、ただ此等の語の表層、字面のみからだけでは意味上 AS の格付けはできない。

勢いコンテキストが台頭してくる。特にこの場合にはこの 2 つの AS に先行するコンテキストであるところの pre-context (PRC) が問題となってくる。これらの AS が AS として受け容れられるのに、PRC の方が、その文に後続するコンテキスト、即ち post-context (POC) より大きな意味を持つことは、この“*Nothing.*”以下を伏せた場合と、“*Anything.*”以前を消去した場合とを比較するとき一目瞭然である。後者の場合に、“*Anything.*”“*Nothing.*”と後続する文章との繋がりは余りにも唐突であり、その間隙を埋めるのには、読者の comprehensive power に俟たねばならぬが、前者の場合なら比較的容易にその意味を掴むことができる。“*Anything.*”と“*Nothing.*”は本文の PRC から次のように解釈できよう。

Anything might (could) be done during these two hours. *Nothing*, however, could be done during those hours.

このように、所謂 ‘sentence sense’ を抽出することは、さほど困難なことではなく、法 (mood) の含みさえほぼ正確に伝えられる。本例では PRC なる先導者の存在あればこそ、それを抽出できるのである。

この(2)の初頭に出ている“Two hours.”は、ここでは POC しか探索していないが、この AS に先行する PRC をも考えれば、さらに含蓄のある節構造の抽出も可能である。この種の PRC の例を挙げるなら、

(3) Oh, *this journey!* It was two hours cut clean out of this life; *two hours* in which he might have done so much—written the perfect poem, for example, or read the one illuminating book. Instead of which—his gorge rose at the smell of the dusty cushions against which he was leaning. (*id.*: *Crome Yellow*)

ここでの *two hours* はこの PRC によって主辞 (nominative)⁷⁾というより賓辞 (predicative) として認められ主従関係は自ずから認識される。このように遡及していくと究極的にはその章の初め、その著作の初めまで遡りかねないが、又このようにしなければ到底その真意の掴み得ない場合も当然考えられるが、概して paragraph の段階で咀嚼できる場合の方が遙かに多い。

(2) の最後の文の動詞の tense もその PRC から容易に窺うことができ、そこにも nexus が生じてくる。(3) の *this journey!* は当該文型から容易にその sentence structure を察知することができる。

(4) She (Priscilla) leaned forward, speaking in a confidential whisper ; every now and then she uttered a deep gurgle of laughter. “...mixed bathing...saw them out of my window...no doubt of it...” The laughter broke out again. Denis laughed too. Barbecue-Smith was tossed on the floor. (id. : *Crome Yellow*)
 parens. は筆者の挿入。

上記(4)は brachylogy の例と言えるものであるが、ここで我々は本文でなければ Priscilla の心中のほどを吐露できないという事をまず感知しなければならない。すべてが文面に出ていないが、この事は(4)の PRC と POC とから理解できる。(4)のように PRC と POC との両者が同時に考慮対象となるときは、ただ漠然とコンテキストと言ってよいが、AS の置かれている場(location)によっては(2)で触れ又これからも触れてゆくように、当該コンテキストを分析し関連するコンテキストを明確化した方が、文意把握に大きく繋がるは自明の理である。

5. コンテキストから独立した AS

Jespersen は文を定義付けて、

A sentence is a (relatively) complete and independent unit of communication.

(*Essentials of E. G.*, 1933, 10. 9.)

と言っているが、やはりこの ‘complete and independent’ の条件付けには ‘(relatively)’ と言っただけでは、どうしても曖昧模糊としたとした憾は拭拭できないない。一方これに関連して Roberts は次のように言っている。

We sometimes think of sentences as being “complete thought.” They are complete, in a way, but in another way they aren’t complete at all. Most sentences are closely connected in form and meaning with sentences that go before (PRC) and sentences that come after (POC). A sentence is usually not complete in meaning. It is complete in the sense that it consists of one of a number of word patterns, and the sentence is complete when the pattern has been completed.

(*Patterns of English*, 1956, p. 58)

parens. は筆者の挿入。

ここに Roberts が ‘Most sentences are closely connected....’ と言っているように、AS にせよ、FS にせよ、その PRC や、POC から遊離した文も無いわけではない。

その例として次の(5)、(6)が挙げられよう。

(5) *Sitting-room, bed-room, lumber-room.* All as they should be. *Nobody under the table, nobody under the sofa, a small fire in the grate, spoon and basin ready, and the little saucepan of gruel* (Scrooge had a cold in his head) *upon a hob. Nobody under the bed ; nobody in the closet ; nobody in his dressing-gown, which was hanging up in a suspicious attitude against the wall. Lumber-room as usual. Old fire-guard, old shoes, two fish-baskets, washing-stand on the three legs, and a poker.*

(Dickens, C. : *A Christmas Carol*)

(6) And after all the weather was ideal. They could not have a more perfect day for a garden-party if they had ordered it. *Windless, warm, the sky without a cloud.* Only the blue was veiled with a haze of light gold, as it is sometimes in early summer.

(Mansfield, K. : *The Garden Party*)

(5)全体と(6)の AS を比較すると、前者はその paragraph 全体、更に一步踏み込むと、各 AS が(6)の形容詞系 AS によく似た機能を持ち、我々は然程コンテキストの助けを借りずとも、その意味内容を比較的容易に咀嚼できる。両者とも copula を適材適所に考え合わせるなら、その PRC や POC を考えずとも意味内容の理解には然したる支障はない。次例もこれまで引用されてきた PRC、POC とは趣を異にしたまま比較的独立的にその意味内容を把握できる。

(7) “*Sh — sh, darling.*” was the reply. “It’s rude.”

(Huxley, A. : *Limbo*)

上例の italics は、我々が受ける印象に共通性が緻密であればあるほど、それだけコンテキストからの高い自立性を示すと言える。斯様な AS は、単にコンテキストの支えを必要としないのみならず、却って他の語句や文の解釈に一步進んだ内面的な洞察力を提供することさえ有り得る。

6. PRC と AS

(8) “*God.*”

Dick’s mind remained a perfect blank. The word seemed to convey him nothing at all. *God, God.* After a long time there appeared before his inward eye the face of a boy he had known at school and at

Oxford, one Godfrey Wilkinson, called God for short.
 “Wilkinson.” *Ten seconds and a fifth.* (id.: *Limbo*)

上例で初頭の“God.”という文から“Wilkinson.” *Ten seconds and a fifth.* という文に到るまでの経緯は上記例文中のみに見られる前後関係である internal context (INC)⁹⁾からだけではどうしても判然としない。“God.”に対する PRC が必要前提条件の場合である。即ち Dick が Rogers という amateur psychoanalyst のところへ精神上の苦悩の解決に訪れ診察を受けている現況という PRC が与えられなければならない。最後の10 1/5秒というのは Rogers が“God.”なる言を発してから Dick が“Wilkinson.”と答えるまでの所要時間である。従って“God.”と“Wilkinson.”とに挟まれた INC はその過程の状況説明の位置にある。この(8)と同類項にある、次の(9)と(10)を挙げておく。

(9) *Curves, curves*: he repeated the word slowly, trying as he did so to find some term in which to give expression to his appreciation. *Curves—no*, that was inadequate.

(Huxley, A.: *Crome Yellow*)

(10) *Down, down, down.* There was nothing else to do, so Alice soon began talking again.

(Carrol, L.: *Alice's Adventures in Wonderland*)

dilogy から palillogy へと強調興奮の度合が高くなるのは言うまでもないが、(8)同様その PRC なしでは文意を理解することは比較的困難である。(9)では‘Curves’が何のことを述べているかは、この俚では掴み難い。これを文としてコンテキストから独立させても当該 PRC なしでは文意の把握は期し難いのである。また(9)例中の modal adverb にしても“it is not ‘curves’; there must be some other term.”のような含蓄は、コンテキストの関数としてしか、我々には与えられない。次例の modal adverb にしても同断である。

(11) “Must one hate a devil that makes one live?” she asked. He turned his eyes to her with a touch of a satiric smile.

“If one lives, *no*,” he said.

(Lawrence, D. H.: *The Ladybird*)

(12) He had no real relation with his home, *not* this man which he now was.

(id.: *The Rainbow*)

7. 発話の社会的意味と AS

Fries は発話の意味に関して次のように述べている。

The total meaning of our utterances consists not only of the linguistic meaning—the lexical meaning and the structural meaning—but also of the “social” meaning. To grasp only the linguistic meaning is “mere verbalism.”

(*The Structure of English*, 1952, p. 295.)

ここに Fries の言う“mere verbalism”は筆者の言う『意味の恒数的な面』へのこだわりと直結するが、社会的、文化的意味にしても『恒数』の座を占めている。発話全体の意味は、言語の意味と、社会的文化的意味から成り立つというのではなく、寧ろ後者は分析に依って前者から抽出されたものに過ぎず、残された基体には依然として分析し尽くされずにいる意味規定の要因が含まれていることを忘れてはならない。言語を扱うのに言語に拘泥し過ぎることを警戒しなければならない。

『文とは一個の intelligible purpose を示す語、または語群である。』⁹⁾とあっさり言えるなら、翻訳機器の組成も可なり容易なものになりそうだが、中々そうは問屋が卸さない。その上この‘intelligibility’については、Fries の‘total meaning’に対するのと同じ周到な配慮と綿密な洞察がなければ、その本体の活用は疎か、精確な説明さへ覚束無い。一個の文については、その多面的背景から複数の解釈が、いわば正解として成り立ち得るという前提から出発しなければならない。即ち言語の学習過程に必然的に伴う個人差に起因して、その恒数的な面にすら多少の寛容度 (latitude) があることを容認して掛かねばならない。この際、意味の『関数』を規定する方程式を作ることが、現在の段階で果たして如何ほどの現実味を帯びてくるかを第一に、その作られる方程式が、どの因子にどれほどの影響を与えるかが、議論的となる major premise である。これらの問題の究明に当たって有力な示唆にめぐまれる機会は FS より AS の範疇により多く見受けられよう。

Gardiner は

Without the postulate that speaker and listener are able to direct their attention to the same thing, the very notion of speech is an absurdity, and any rational theory on the subject becomes impossible.

(*The Theory of Speech and Language*, 1932, p. 81.)

と言っているが、実際に我々の言語活動がこの‘postu-

late'を満足させようとするとき、PRCを許に頼るべき幾つかの手段の解明が先決要件である。

8. FS から AS へ

ここら辺りで Verbal¹⁰⁾が出番を待ちあぐねている。

(13) "What a pleasure it is," said Denis, "*to do somebody a kindness...*" (Crome Yellow)

(14) And the style! Christ! *to think that he was responsible, at least in part, for this.* (Limbo)

(15) Oh, what a fool I am! *To imagine myself into a state like this!*
(Christie, A.: *The Philomel Cottage*)

(16) "I know they do (suffer). Makes it all the worse. It wouldn't matter if it were only just us. At least, it would matter, but one could bear it more easily. *To be just one of a crowd all in the same state.*" (The Ladybird)
paren. は筆者の挿入。

(17) "...And *to think that I'm only just beginning to see through the silliness of the whole thing!* It's incredible to me that anyone should have escaped these horrors." (Crome Yellow)

(18) "*To think that I should have a sister like this,*" he said to himself. She was terrifying. (Limbo)

(13)は一応 AS から除外され、(15)は(16)、(17)、(18)への過渡期を示す文例である。(13)は名詞系、(14)以下はすべて副詞系と解される。歓喜の感情の高揚のため Exclamation Point が、Pitch Level/1/の 'said Denis' により split されている peculiar な文体が(13)である。(14)あたりから amorphousness を帯びてきており、(14)では infinitive が判断の根拠を示して "And the style! Christ!" と内心叫ばねばならなくなった psychology を物語っている。Huxley, A.の専売特許とも言えるところの Represented Speech の文体である。

(15)を飛んで 'Absolute Infinitive Phrase' の(16)にはいると、これには主辞と賓辞の二重判断形式を備えているわけでも無ければ、節構成の一部ともなっておらずに先行する文から独立している。PRC の 'it' との相関関係があるようにも見えるが、そう見るのは無理であろう。一方(15)には前文と後文との間に、後文から前文を関連

付ける syntactic variant が顔を覗かせている。

(16)は PRC、(17)は POC に依存し(18)は言わば、absolute value をもった AS である。(14)、(15)、(17)、(18)を考えて見るにつけても 'think' 類の動詞の機能は検討するに値するが、多岐に亘るので後日に期したい。(17)では、この infinitive の PRC に対する従属度は極めて低く、専ら POC に依存している。(16)以下の文例中の infinitives には、それぞれに 'unthinkableness' 即ち 'Infinitive of Deprecation'¹¹⁾が感ぜられる。(14)、(15)にもこの気配は感ぜられると言えようが、construction が他と異なっている。次例(19)などには deprecation というより、その amorphous infinitive (AS) の PRC に対して parataxis ならぬ hypotaxis の窺える文例なので(16)以下とは自ずと趣を異にしている。

(19) "...Strike home, strike true, strike sure. Strike to destroy it. Strike. Strike! *To destroy the world of man....*" (The Ladybird)

上記文例の infinitives には 'It...that....' の構文を媒体としての syntactic variants が種々考えられる。また sentence adverb として相乗効果を盛り上げている点にも興味が惹かれる。とかく言語は polyhedron なので扱いにくい。

(20) And she looked at her blue green eyes—the eyes of the wild-cat on a bough. Yes, the lovely blue-green iris drawn tight like a screen. *Supposing it should relax. Suppsing it should unfold, and open out the dark depths, the dark, dilated pupil! Supposing it should?* (The Ladybird)

先に、この種の動詞の AS に deprecation が感じられたが、上例の 'suppose' から、これも deprecation と同質の仮想ではあるにしても悲愴感を漂わせていることが何者かを物語っている。またこの分詞が接続詞機能を果たすにしても 'bare infinitive' ではこれだけのニュアンスは発揮できないであろう。participle が女性的だとすれば、bare infinitive は男性的とでも言うべきなのだろうか。

次の(21)に3語から成る AS を挙げるが、その有無に依っては直前の文の臨場感に少なからぬ影響を与えるであろう。

(21) I remember standing at an end window of our Quonset hut for a very long time, looking out at the slanting, dreary rain, my trigger finger itching imper-

ceptibly, *if at all*.

(Salinger, J. D., : *For Esme—with Love and Squalor*)

Zandvoort は to-infinitive が “surprise or indignation” のほかに “a wish that is not likely to be fulfilled”¹²⁾ をも表わすと述べている。次の 2 例がそのような含蓄を秘めている。

(22) “There. Now we’ve run it to earth. Were you really sewing a shirt for me! Is it finished? Can I put it on at this minute?”

“That one isn’t finished, but the first one is.”

“I say, darling, let me go and put it on. *To think I should have it next my skin!* I shall feel you all around me, all over me. I say how marvellous that would be! Won’t you come?” (The Ladybird)

(23) “*To be a young man these days.* What wouldn’t I give for that! Think of the time they have. No chaperons; bachelor girls with flats and latchkeys....”

(Waugh, A.: “... ‘Sir’ She Said”)

ここに amorphous clause の例がある。絶対付加疑問のみに限定できないが、それがよく使われて来ているのも言語が生き物であるからである。次例もこの付加疑問と同様の観点に立ち得る AS で刺身の山葵のように発話に一入生気を与える素因になっている。ときに下掲(24)の italics の発話の intonation はその PRC から判定するに当然として rising ならぬ even とならねばならない。

(24) “You know what I do? You know what I do? I’m ashamed to tell ya, but you know what I very nearly goddam do every night? *When I get home?* You want to know?”

(Salinger, J. D.: *Pretty Mouth and Green My Eyes*)

9. 結 論

如何なる語(句)もその語(句)に関わる PRC や POC が確立されれば、FS より間口奥行きのある AS になり得る。PRC と POC とが相俟って相乗効果を発揮するなら、発話ならずとも、それだけ AS の味の濃くなるは必定である。

とくに発話では、話者と聴者相互の心情に依存しつ

も多種多様な意味合いが四次元的に伝えられることは洋の東西を問わず先ず同断であろう。発話が一定の纏まりをもつ音声連続体であればこそである。

FS は所謂 commonplace であるので概して新鮮味に乏しいのに対して、変則的である AS の方には珍奇性という魅力があると同時に、paragraph に見られる AS は絶無の自然体であることも言を俟たない。

日々同じ道路を通っての帰宅と、同じ道路を通っての帰宅でも日常とは異なった少なからぬ変様の介在する場合の方が、それだけ注目に値することは万人の共感するところである。斯様なところに AS という存在の付加価値を実感している。

註

- 1) Bloomfield, L.: *Language*, The University of Chicago Press, 1984, cf. Chap. II.
- 2) Fries, C. C.: *The Structure of English*, New York (Harcourt), 1952, p. 41, ft. 16.
- 3) Crystal, D. & Quirk, R.: *System of Prosodic and Paralinguistic Features in English*, The Hague: Mouton, 1965.
- 4) cf. 山口秀夫「文の研究」(篠崎書林、1959)、sec. 35 [言語経済]
- 5) cf. Gardiner, A. H.: *The Theory of Speech and Language*, London (O. U. P.), 1951, Sec. 33-49.
- 6) Philipps, K. C.: “Asyndetic Relative Clauses in Late Middle English,” *English Studies* August, Amsterdam, 1965, p. 323. 荒木一雄「関係詞」(研究社1954)、pp. 73-78.
- 7) 中島文雄「英文法の体系」(研究社、1961) pp. 131-141.
- 8) 観点に拠っては PRC にも POC にもなる可能性のある当該問題の AS に挟まれたコンテクストである。
Context { internal context (INC)
external context (EXC)
(EXC) { pre-context (PRC)
post-cotext (POC)
cf. Ogden, C. K. & Richards, I.A.: *The Meaning of Meaning*, New York (Harcourt), 1936, pp. 263f.
- 9) Gardiner, A. H.: *op. cit.*, p. 98.
“A sentence is a word or set of words revealing an intelligible purpose.”
“A sentence is a word or set of words followed by a pause revealing an intelligible purpose.”
- 10) Verbal=Verbid
Jespersen, O.
The Philosophy of Grammar, London (Allen), 1924, p. 87.
A Modern English Grammar, IV., London (Allen), 1961, pp. 85-97.
Analytic Syntax, London (Allen), 1937, pp. 157-160.
- 11) *id.* *A Modern English Grammar, V.*, London (Allen), 1961, 20. 3 2.
- 12) Zandvoort, R. W.: *A Handbook of English Grammar*, Groningen (Wolters), 4th ed., 1966, Sec. 36.